



昭和30年頃、植えたばかりの防砂林にたたずむ村次郎
(大須賀海岸)

むら じろう 村次郎

1916年5月4日生

八戸の海辺の風景を愛してやまない孤高なる詩人。八戸ルネッサンスの創始者。家業の旅館「石田家」を継ぐため文学活動は放棄したが、制作者としての生き方を持続。

幻の詩人と言われた村次郎は、1916(大正5)年、三戸郡鮫村(現・八戸市鮫町)の石田家旅館の長男として生まれ、1997(平成9)年没した。

慶應義塾大学でフランス文学を学び、同人誌「塾文化」「文科」「山の樹」「詩集」に参加し作品を発表。他に「三田文学」「四季」「歴呈」に応募入選作品が掲載、また「文芸汎論」「文科評論」「三田文学」「新文化」などに依頼作品を発表。中村真一郎や芥川比呂志、小山正孝、堀田善衛らとともに活躍し、将来を嘱望された。(堀田善衛著『若き詩人たちの肖像』に村次郎に関する記述あり。)また、中村真一郎は「生粋の八戸弁をあやつる天使は、その心をしめつける苦痛と悲哀とを、少ない口数の詩行に閉じ込めて、その小詩は我等、生まれながらの都会児の軽妙な、時に軽佻な冗舌の交換の上に一瞬、懼れを孕んだ沈黙を通過せしめたものであった」と語っている。

戦後、応召先の中国から八戸に帰還、「あのなっす・そさえて」を設立して郷里の文芸復興に努めた。詩集『忘魚の歌』(昭和22年)『風の歌』(昭和23年)を刊行したが、昭和27年、実家・石田家旅館の再建のため、家業に専念し、文学活動から離脱することを決意。

しかし、その後も県内外の文学者・文化人の尊敬を集め、棟方志功や草野心平との親交はよく知られている。また、夏堀正元や三浦哲郎をはじめ、郷土ゆかりの作家にも大きな影響を与えた。

郷里の自然と風物を愛した村次郎は、文学にとどまらず、言語学、民俗学(鮫神楽)、大須賀海岸の自然調査、漁業など、幅広い分野に造詣が深く、生涯にわたって調査研究を続けた。司馬遼太郎が『街道をゆく』で紹介した「村次郎言語論」も各方面に大きな影響を与えた。

2011(平成23)年、「村次郎の会」によって、全詩集が刊行された。